

大衆社会の価値観に関する社会心理学的研究：Ⅰ*

——職業観をと——

東京大学

浜田 恵子**

Ⅰ 問 題

大衆社会を、社会階層という視点からとらえると、一方では、現象的に階層的平準化が進み、他方では、基本的に階層の固定化が進んでいるといえよう。

階層的平準化とは、いわゆる大衆化現象としてとらえられる面であり、経済的には所得の平準化、政治的には民主主義理念の実現、文化的には大衆文化の浸透などにみられる。しかし、階層が平準化されたこと、つまり、階層間の差が縮まってきたことは、けつして階層が開放的になったことを意味しているわけではない。少なくとも資本主義体制内では、階層は開放的ではありえない。むしろ、階層的平準化が、階層が開放的でないことをおおいにかくすという機能を果たしていることに注目せねばならない。

階層の固定化は、狭義の社会的移動—階層における個人的垂直移動の分析によつて、もつとも明らかになる。この個人的垂直移動には、世代内および世代間移動が考えられる。日本社会学会の研究によれば（日本社会学会調査委員会編、1958）一般に世代内移動はむずかしく、しかも、移動を妨げている原因が学歴にあると考えられているために、子弟に教育を受けさせて世代間の垂直移動をしようとする構えが生じるといわれる。しかし、期待される世代間移動も、実際にはけつして容易ではない。

このような大衆社会的状況の反映として、大衆社会的価値観が形成される。大衆社会的価値観は、生活のすべての領域にわたつて浸透していると考えられるが、ここではまず職業観をとりあげて、大衆社会的価値観のあらわれをみよう。いかなる社会においても、職業は、社会

にとつても、個人にとつても、重要な活動であることはいうまでもないが、とくに大衆社会的状況においては、極端に原子化された個人と、極端に巨大化・組織化された集団とが、職業という活動をとおして、相互に関連するという意味で、職業のもつ意義がきわめて大きいと考えられるからである。本来、職業が、個人的な面と社会的な面ともつていところから、個人本位の職業観（栄利主義・生活主義・成功主義の職業観）と社会本位の職業観と職業本位の職業観があると分類されている（松島静雄、1950、178～181）。

今日では、職業を趣味や娯楽を満たすための手段とみなし、生きがいをもする余暇に見出すような生活主義の職業観の浸透が著しいと思われる。しかし、大衆社会的状況がすすむにつれ、大衆文化の浸透が著しくなるために、余暇すら型にはまつた非個性的なものとなり、そこに生きがいを見出すことがむずかしくなる傾向がみられる。そこで、逆に職業のなかに、大衆社会的価値基準から逸脱しない価値を、むしろ積極的に求めることにより、社会に「適応」しようとする職業観も生じてきている。前者のようなきわめて逃避的消極的な生活主義の職業観と、後者のような積極的ではあるが社会と対決する姿勢のかけている、結局は前者の裏がえしにすぎない職業観とをふくめて、大衆社会的職業観と名づけることができるであろう。

この大衆社会的職業観がとくに問題なのは、これらの職業観が、現代社会で欲求不満をおこさないための自己合理化の手段となつている点である。すなわち、これらの職業観は、人間の欲求不満を巧みに解消させることにより、社会をよりよいものにしていこうという意欲を失わせ、結局のところ、自己実現化をはばんでいると考えられる。

職業観の形成という問題に関して、学校教育の役割をとりあげないわけにはいかない。大衆社会においては、教育は、国家により大衆操作のきわめて有力な手段のひ

* The social-psychological approach to the values in mass-society: I. An analysis of the 9th graders' view of occupation.

** by Keiko Hamada (University of Tokyo)

とつとして利用される。「公」教育は必然的なものとなり、「体制への適応をその指導理念として」「知的凡庸と国民的忠誠心と職業指導を」行なうことを、その任務とするようになる(堀尾輝久, 1957)。戦後の日本では、とくに大衆社会的状況の進行が著しいといわれるが、一連の教育政策をみると、とくに「逆コース」が始まったといわれるところから、教育が大衆操作の手段として利用されていることが明白になる。職業観に関係した部分で、たとえば、改訂学習指導要領でとくに問題になつた進路指導に関する部分に流れている基本的な考えかたは、「生徒の進路特性に応じた教育」を行ない生徒が適性に応じた進路を選択すれば、生徒は社会に入つて「適応」するだろうという考えかたである。進路指導のすべての出発点は、「適性」であるが、その「適性」概念自体が科学的にきわめて問題が多いこと、また、職業を扱う場合に、個人が社会に適応するという意味での社会的意義のみ問題にして、個人が職業をとおして社会を変革するという意味での社会的意義を無視しているということは、注目に値する。つまり、大衆社会的職業観の形成にさいして、学校教育が、むしろ積極的にこれを促進する役割さえ果たそうとしているのである。

以上述べてきたような問題点を含む大衆社会的状況のなかで育ち、大衆社会の教育を受けている各階層の中学生は、どのような価値観をもっているのかを、職業観をとおして明らかにするのが、本研究の目的である。仮説としては、大衆社会の分析から次の2つ、すなわち、
①大衆社会的職業観が中学生に浸透しているであろう
②中学生の進路選択および職業観において、階層の固定化が顕著にあらわれているであろう

をとりあげて、質問紙法により調査する。さらに、その結果にもとづいて、ふたたび進路指導の考えかたを検討してみたい。

II 調査の手づき

2. 1 予備調査

現在の中学生が、自分の将来の生活をどのように考えているかを知るために、(1)将来どんな職業につきたいかまた、その理由と目的 (2)将来どんな人になりたいか、の2点について作文させた。

この作文を検討しながら、問題意識に基づいて質問紙を作成し、これをA中学校2年生44名に実施した。調査実施後、男女各2名に面接した。

2. 2 本調査

予備調査の結果に基づきながら、さらに若干補足して質問紙を作成した。質問紙は、(1)大衆社会的職業観の浸透 (2)進路選択および職業観における階層の固定化の進行を明らかにするための2つの部分から成っている。さらに、(3)職業生活を中心にして将来について作文させた(Table 1)。

作成した質問紙を、都内T区立I中学校3年生245名(男子135名、女子110名)に実施した。調査年月日は1962年9月18日および11月13日である。

被調査者の階層分類は、被調査者自身が書いた親の職業および生活環境調査表による父兄の職業(学歴も参考にした)によつて分類した。所属階層不明の男子6名、女子7名、計13名を除いて、実際に集計したのは232名(男子129名、女子103名)である(Table 2)。

Table 1 質問紙

<調査票 1>

_____年 _____組 名前_____
(親の職業 _____)
(1) あなたは、将来、じつさいに、どんな職業につこうか考えたことがありますか。つぎのうちからあてはまるものをえらんで()のなかに○をつけてください。
() 小学生のときから、かんがえている
() 中学生になつてから、かんがえた
() かんがえたことがなかつた
(2) あなたは、中学校を卒業したら、どうするつもりですか。つぎのうちからあてはまるものをえらんで()のなかに○をつけてください。
() すぐつとめる
() 家事のみならいをする
() 夜間高校へ行きながらつとめる
() 資格をうるための学校(たとえば理容学校、看護学校)へ行く
() 工業高校か商業高校をでてからつとめる
() 普通高校をでてからつとめる
() 普通高校から大学へ行く

- (3) あなたは、将来、じつさいに、どんな職業につきたいですか。つきたい職業を、できるだけ詳しく（たとえば、どんなところで、どんな仕事がしたいか など）かいてください。
- つきたい職業 ()
- あなたは、どうして、その職業につきたいのですか。
- その理由 ()
- あなたは、なんのために、その職業につきたいのですか。
- その目的 ()
- あなたがつきたい職業について、あなたはどのように思いますか。①から⑥までについてそれぞれあてはまるものを○でかこんでください。

- ① お金は（大変もうかる、かなりもうかる、^{もうかるほうで}もうからない、あまりもうからない、ぜんぜんもうからない、^{もうかるほうで}ほうでもない）
- ② 仕事のやりがいは（大変ある、かなりある、^{あるほうでもな}いほうでもない、あまりない、ぜんぜんない）
- ③ 地位は（大変たかい、かなりたかい、^{たかくもひくくもない}、ややひくい、非常にひくい）
- ④ よのなかのために（大変なる、かなりなる、^{なるほうでもなら}ないほうでもない、あまりならない、ぜんぜんならない）
- ⑤ 仕事は（大変らくである、かなりらくである、^{らくでも、らくで}、ややつらい、非常につらい）
- ⑥ 全体として価値は（大変たかい、かなりたかい、^{たかくもひくくもない}、ややひくい、非常にひくい）
- (4) もし、あなたが、どんな職業にでもつけるとしたら、あなたはどんな職業についてみたいと思いますか。いちばんついてみたいと思う職業をひとつだけくわしくかいてください。
- ついてみたい職業 ()
- (5) つぎの職業について、①から⑥までの基準にしたがつて、順に1から12までの番号を () のなかに、つけてください。

① お金もうかる順

- | | |
|-------------------|---------------------------|
| () 町工場の工員 | () ふつうの会社員（将来は会社の幹部になれる） |
| () 大きな店やデパートの店員 | () 大 学 教 授 |
| () 大工場の技師 | () 会社や役所のふつうの事務員 |
| () 日やとい人夫 | () 大工場の工員 |
| () 小学校の先生 | () ふつうの小さな店の店員 |
| () タクシーやトラックの運転手 | () 大会社や役所の課長 |

② 仕事のやりがいがある順 (職業名は同上)

③ 地位が高い順 (")

④ よのなかのためになる順 (")

⑤ 仕事がらくな順 (")

⑥ 全体として価値のたかい順 (")

- (6) A. 一般の人は、職業をえらぶとき、どういう基準で、えらぶでしょうか。aらんの () のなかに順に番号をつけてください。（番号はいくつつけてもいいが、かならずひとつはつけること）
- B. あなたが、職業をえらぶとき、どういう基準でえらびますか。bらんの () のなかに順に番号をつけてください。（番号はいくつつけてもいいが、かならずひとつはつけること）

aらん

- () 有名になれるかどうか
- () 仕事がらくかどうか
- () 自分が好きかどうか
- () 親の仕事（家業）
- () 収入がよいかどうか
- () 自分に適しているかどうか
- () よのなかのためになるかどうか
- () 親や先生の意見
- () 地位がたかいかどうか
- () 収入が安定しているかどうか
- () 仕事のやりがいがあるかどうか
- () 家の経済を楽にできるかどうか
- () その職業につくことによつて立派な人になれるかどうか

bらん

- ()
- ()
- ()
- ()
- ()
- ()
- ()
- ()
- ()
- ()
- ()
- ()

<調査票 2>

- (1) つぎの職業について、①から⑤までの基準にしたがつて、順に1から12までの番号を()のなかにつけてください。(注 職業名12は<調査票1>(5)と同じ)
- ① 地位が高い順 ② 自分がなりたい順 (女子の人は、自分の夫になつてほしいと思う順)
 ③ やりがいのある順 ④ スマートな順
 ⑤ (一般の人がどう思っているというのではなく) 自分が価値があると思う順
- (2) 将来、どんな生きかたをしたいか、ある中学校の生徒に質問したところ、つぎのような答がでました。
- A. 工員になつて、しつかりした技術を身につけようと思う。ほねがおれても、実力をためせるような、やりがいのある仕事をしたい。
- B. ぼくは、勉強して、一流の大学に入り、そうして、大きな会社のサラリーマンになりたい。収入はよいし、年がたてば、しぜんに、えらくなれる。
- C. 将来は、大学をでてから、技師になり、技術の研究をしたい。今は、科学技術の時代だから、技術者の仕事は、ひじょうに大切だと思う。
- D. ぼくは、平凡なサラリーマンになりたい。高校をでてから、大きな会社に入りたい。給料は、比較的いいし、つぶれるようなこともなく安定していると思う。それに、きらくでいい。
- E. ぼくは、工業高校か、ふつう高校をでて、技師になりたい。工場などで、工員の人のわからないことを教えてあげたり、機械の修理などもしたい。
- F. 世のなかのことを考え、社会をよくすることができるような職業につきたい。たとえば、先生という職業は、収入もすくなくて、つらい職業だと思うが、ひじょうによいものかのために、やりがいがあると思う。
- G. 自分で店をもつて、商売をやりたい。お客さんに、いつも親切にしてあげれば、みんなによろこばれるだろうしお金も、もうかるだろうと思う。
- H.

このような生きかたのうち、(女子の人は、自分の夫の生きかたとして、考えて)

- ① あなたの生きかたに、もつとも近いものは、どれですか。下の解答らんに、ひとつだけ○をつけてください。あなたの生きかたと一致するものがないときは、あなたの考えを、上のHらんにくわしく書いてください。
- ② あなたが考えて、(なれるかどうかは、べつとして) のぞましい生きかただと思うのは、どれとどれですか。下の解答らんののぞましいと思うものに、○をつけてください。(いくつつけてもよい。)

解答らん

	A	B	C	D	E	F	G	H
① の 答→ (ひとつだけ○をつける)								
② の 答→ (いくつ○をつけてもよい)								

- (3) あなたは、将来どんな生き方をしたいと思いますか。就職する人は、どんな職業につきたいか、進学する人は、どういう高校へ行きたいか、高校を卒業したらどうするつもりか、そして将来は、どんな職業につきたいか、などあなたの考えているとおりを、そのままくわしく書いてください。

Table 2 被調査者の階層別人数分布

本研究での分類	内 容	小 分 類	男 子		女 子	
			実数	小 計 (%)	実数	小 計 (%)
I	上級ホワイトカラー 以上	専門的技術的職業	5		5	
		管理的職業	4	29(22.5)	1	31(30.1)
		事務的管理的職業	20		25	
II	下級ホワイトカラー および旧中間層	事務的職業およびサービス業	23		11	
		販売的管理的職業	11	47(36.4)	13	33(32.0)
		販売的職業	13		9	
III	ブルーカラー	熟練的職業	33		21	
		半および不熟練的職業	19	53(41.1)	14	39(37.9)
		その他	1		4	

Table 3 職業選択の基準

		収入が多 いか	適してい るか	好きか	収入が安 定してい るか	らくか	家計援助	親や先生 の意見	地位が高 いか	やりがい があるか	有名にな れるか	家業	よのなか の為にな るか	立派な人 になれる か
男子	一般的基準	68(57)	55(46)	43(36)	42(35)	29(24)	23(19)	21(18)	20(17)	16(13)	9(8)	10(8)	10(8)	10(8)
	個人的基準	37(32)	81(71)	75(65)	37(32)	12(10)	10(9)	22(19)	3(3)	38(33)	1(1)	11(10)	17(15)	2(2)
女子	一般的基準	59(64)	41(45)	36(39)	37(40)	21(23)	11(12)	12(13)	16(17)	14(15)	16(17)	4(4)	5(5)	1(1)
	個人的基準	24(25)	75(79)	64(67)	24(25)	14(15)	4(4)	28(30)	3(3)	27(28)	1(1)	4(4)	12(13)	2(2)

(注 カッコ内の数値は%)

Ⅲ 調査の結果

本調査の結果は、大衆社会的職業観の浸透と進路選択・職業観における階層の固定化の進行との2つの方向からまとめ、さらに事例研究を加えた。

3. 1 大衆社会的職業観の浸透

(1) 職業選択の基準

職業選択の基準を、一般に人がどう選ぶかという一般的な場合（以下一般的基準とよぶ）と、あなたがどう選ぶかという個人的な場合（以下個人的基準とよぶ）と、別々に多肢選択させた（Table 1<調査票1>(6)）。第3位までを、各基準別に単純集計した（Table 3）。

この表から、まず一般的基準として考えられている基準は、「収入が多いか」で、男子の57.1%、女子の64.1%がこの基準を第3位までに選択している。つづいて約35%以上の者から選択されている基準は、「適しているか」「収入が安定しているか」「好きか」という基準である。一方、「有名になれるか」「家業」「よのなかのためになるか」「立派な人になれるか」という基準は、多少男女差がみられるが、全体として選択されたパーセンテージは低い。

次に、個人的基準として考えられている基準は、「適しているか」「好きか」で、前者は男子の70.5%女子の79.0%から、後者は男子の65.3%女子の67.4%から、選択されている。つづいて、男子では、「やりがいがあるか」が33.1%、「収入が多いか」および「収入が安定しているか」がおのおの32.2%であり、女子では、「親や先生の意見」が29.5%、「やりがいがあるか」28.4%が、「収入が多いか」および「収入が安定しているか」がおのおの25.3%である。一方、「有名になれるか」「立派な人になれるか」「地位が高いか」という基準は、いずれも約3%以下である。

ここで、一般的基準と個人的基準とを比較してみると個人的基準としては、一般的基準として第2、3位であった「適しているか」「好きか」という基準が第1、2

位を占め、たいして問題にされていない「やりがいがあるか」という基準が第3位を占めている。つづいて、一般的基準として第1、3位であった「収入が多いか」「収入が安定しているか」という基準が、第4、5位に並んでいる。またパーセンテージは低くなるが、一般的基準より多く選択された個人的基準としては、「よのなかのためになるか」という基準があり、逆に、一般的基準として、より多く選択された個人的基準としては、「らくか」「地位が高いか」「有名になれるか」という基準がある。

(2) 職業選択の理由と目的

自己の選択した職業について、その職業の選択理由および目的を自由記述させた（Table 1<調査票1>(3)）。選択の理由と目的は、必ずしも明確に区別される性質のものではないので一括して整理しカテゴライズしたが、カテゴリの表現はあくまでも便宜的なものにすぎない（Table 4）。

この結果から次のような傾向があることを指摘できる。すなわち、第1に、「好きだから」と答えている者は全体の48%であり、他の理由を圧倒している。「適しているから」と答えた者は14%で、他の理由と比べると多い方であるが、パーセンテージとしては必ずしも多くなく、3. 1(1)で「適しているか」という基準を選択している者が70~80%いるという結果と比較すると興味深い。ここで、「好きだから」「適しているから」と答えた者のなかに、これらの理由によつて自己の職業選択をみずから納得させているにすぎないと思われるものも若干あつた。この点についてはあとでふれたい。その他身近な人にならうという理由が17%である。これらの数字から、職業の個人的要因がきわめて重視されている傾向を指摘できよう。

第2に、職業の社会的意義が問題にされていないことを指摘できるだろう。なるほど、「社会を知るため」と答えた者は13%、「社会のため」と答えた者は11%であるが、前者の場合には、「人と接触したい」「世間を知

Table 4 職業選択の理由と目的

カテゴリ	所属階層	男 子				女 子				計(%)
		I	II	III	小計(%)	I	II	III	小計(%)	
個人的	好きだから・興味があるから	12	18	27	57 (51)	17	10	13	40 (44)	97 (48)
	適しているから	6	7	1	14 (13)	2	7	6	15 (16)	29 (14)
	経験があるから	0	3	1	4 (4)	2	4	3	9 (10)	13 (6)
	身近な人にならう	3	6	8	17 (15)	4	3	10	17 (19)	34 (17)
	技術・知識習得のため	2	2	7	11 (10)	2	2	3	7 (8)	18 (9)
	人格形成のため	1	3	4	8 (7)	3	5	2	10 (11)	18 (9)
経済的	収入が多いから	4	5	5	14 (13)	1	3	0	4 (4)	18 (9)
	収入が安定しているから	2	7	3	12 (11)	0	0	1	1 (1)	13 (6)
	将来の生活のため	5	5	7	17 (15)	1	1	5	7 (8)	24 (12)
	家計援助のため	1	2	2	5 (5)	1	0	1	2 (2)	7 (3)
職業的	やりがいがあるから	5	3	3	11 (10)	4	2	2	8 (9)	19 (9)
	将来性があるから	2	4	7	13 (12)	0	1	1	2 (2)	15 (7)
	楽しそうだから	1	2	0	3 (3)	1	7	9	17 (19)	20 (10)
	らくでいいから	3	5	3	11 (10)	3	4	0	7 (8)	18 (9)
社会的	社会を知るため	1	6	3	10 (9)	5	6	5	16 (18)	26 (13)
	社会のため	2	5	7	14 (13)	3	3	3	9 (10)	23 (11)
	その他	1	3	0	4 (4)	0	1	3	4 (4)	8 (4)

りたい」「外国を知りたい」「外国へ行きたい」などが含まれているし、後者の場合でも、「人の役にたたい」「かわいそうな人を助きたい」といった程度で、具体的な行動と必ずしも結びついているとは思われないものも含んでいるので、職業の社会的意義を明確に自覚し将来の生活のなかでそれを実現しようとする姿勢をもつてゐる者は、ごくわずかであるといわねばならない。

第3に、便宜的な理由がめだつ。「職業として楽しそうだから」が10%、「らくでいいから」が9%、また、「経験があるから」が6%である。この中味を検討してみると、「楽しそうだから」というのは、「テレビでみていておもしろそうだから」「服装が整つていてスマートだから」「買物に行つてみたときとても楽しそうだったから」といった程度の判断であるし、「経験があるから」というのは、夏休み中のアルバイトの経験とかちよつと習つたことがあるあるいは、現在習つているといった程度の経験である。これらの数字は必ずしも大きくないけれども、職業を時間的にらくだからとか手を汚さないですむスマートさとかその外見の魅力によつて選択するとなると、みすげせない問題を含んでいよう。

(3) 職業選択を規定するいくつかの要因

選択した12の職業について、8基準で順位づけさせた(Table 1 <調査票1> (5) <調査票2> (1))。各基準ご

とにそれぞれの職業の平均順位を求め、あらためて1～12位までの順位をつけたうえで、さまざまな基準による職業の順位の間に関連を求めた (Table 5)。

ここで、なりたい職業の順位との相関をみると、男子では、「お金がもうかる順の順位との相関が.937、「スマートな順」の順位との相関が.839、「地位が高い順」の順位との相関が.825、「価値が高い順」の順位との相関が.756であり、女子では、順に.930、.958、.930、.916で、いずれも有意水準1%で有意の正相関である。一方、なりたい職業の順位と「やりがいのある順」の順位との相関は、男子.580、女子.678、また、「よのなかのためになる順」の順位との相関は、男子.122、女子-.021であり、前者の女子.678を除いて、有意の相関であるとはいえない。すなわち、自分のなりたい職業というのは、相対的には、収入が多くスマートで地位は高く価値の高い職業であるが、よのなかのためになる方ではなく、やりがいのある方でもない、位置づけされている。

3. 2 進路選択・職業観における階層の固定化の進行

(1) 学歴志望と職業志望

学歴志望と職業志望について、学歴の志望水準は、大学以上志望者を high、高校志望者を middle、それ以下の志望者を low に、職業の志望水準は、階層分類基準

Table 5 職業の順位づけでの基準間の相関

基準名	男 子								女 子							
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8
1 お金もうかる順									**							
2 仕事だらくな順	.497								.725							
3 スマートな順	**	**							**	**						
4 地位が高い順	.888	.717							.946	.757						
5 やりがいがある順	**	*	**						**	**	**					
6 よのなかのためになる順	.888	.622	.937						.916	.732	.979					
7 価値の高い順	*			**					**	**	**	**				
8 なりたい順	.692	.091	.504	.759					.713	.385	.727	.759				
	.070	.311	.091	.210	.566				.098	.294	.119	.138	.500			
	**		**	**	**				**	*	**	**	**			
	.818	.636	.765	.916	.894	.490			.874	.652	.930	.951	.874	.343		
	**	*	**	**			**		**	**	**	**	*		**	
	.937	.636	.839	.825	.580	.122	.756		.930	.862	.958	.930	.678	.021	.916	

(注 表中 ** t検定で 1%有意; * 5%有意)

のⅠの志望者を high, Ⅱの志望者を middle, Ⅲの志望者を low に分類した (Table 1 <調査票1>(2)(3))。分類した結果の階層差について、 χ^2 検定を行なったところ男女とも、学歴志望、職業志望に明らかに階層差がみられた (Table 6)。

すなわち、男女とも、階層上の者ほど学歴志望と職業志望の水準が高い。学歴志望 high の者は、所属階層ⅠⅡⅢの順に、男子は79%, 52%, 23%, 女子は35%, 22%, 3%と減少している。また、職業志望 high の者は

Table 6 学歴志望と職業志望

男 子	学 歴 志 望			職 業 志 望		
	high	middle	low	high	middle	low
Ⅰ	(%) 23(79)	(%) 6(21)	(%) 0(0)	(%) 23(85)	(%) 3(11)	(%) 1(4)
Ⅱ	23(52)	20(45)	1(3)	26(65)	9(23)	5(13)
Ⅲ	12(23)	30(58)	10(19)	16(38)	6(14)	20(48)
	$\chi^2=29.99^{**}$			$\chi^2=24.63^{**}$		

女 子	学 歴 志 望			職 業 志 望		
	high	middle	low	high	middle	low
Ⅰ	(%) 11(35)	(%) 19(61)	(%) 1(3)	(%) 15(54)	(%) 13(46)	(%) 0(0)
Ⅱ	7(22)	22(69)	3(9)	14(45)	16(52)	1(3)
Ⅲ	1(3)	24(63)	13(34)	7(20)	17(49)	11(31)
	$\chi^2=21.46^{**}$			$\chi^2=20.56^{**}$		

(注 表中 ** χ^2 検定で 1%有意)

順に、男子は85%, 65%, 38%, 女子は54%, 45%, 20%と減少している。学歴志望・職業志望 low の者は、逆に増加している傾向にある。

しかし、男女を比較した場合には、女子の方が一般に志望水準は低く、この点は、女性問題、女子教育問題からみても多くの問題を含んでいると思うが、本研究ではたちいない。

なお、とくに男子の場合に、職業志望 high の者でも階層によつて選択している職業の内容が必ずしも同一でないとされるものがあつた。たとえば、男子に多く志望されている技師という職業では、階層Ⅰの学歴志望 high の者のもっている技師というイメージと、階層ⅡあるいはⅢの学歴志望 middle の者のもっているそれとは、必ずしも同一でないかもしれない。同じことが事務員とか会社員という職業についてもいえる。この点についてはさらに精密な研究が必要であろう。

(2) 職業の客観的位置関係の認識

調査票の12の職業について、各基準ごとに順位づけさせた (Table 1 <調査票1>(5)<調査票2>(1))。まず、順位づけについて、階層間の一致係数Wをみると、一致係数の最も高い基準は、「地位の高い順」で、その一致係数は、男子.996、女子.986、また、一致係数の最も低い基準は、「やりがいのある順」で、その一致係数は、男子.896、女子.904であり、いずれも有意水準1%の χ^2 検定で階層差がないといえる。

次に、順位づけの信頼性を検討した。信頼性の最も高い基準は「地位の高い順」で、第1回調査と第2回調査

Table 7 種々の職業の各基準ごとの平均順位

職業名	男								女							
基準*	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8
大工場の技師	2.5	6.6	3.9	3.1	3.0	4.3	3.2	2.5	2.7	7.1	3.4	2.9	3.6	3.6	3.0	2.9
大会社や役所の課長	2.3	2.7	3.5	2.5	6.2	7.8	5.1	3.5	1.8	3.0	2.9	2.3	7.0	8.1	4.4	2.8
ふつうの会社員	4.6	4.1	4.0	4.9	5.5	8.7	6.2	3.7	5.2	4.5	3.7	5.0	5.9	8.7	5.5	3.1
大学教授	3.9	5.8	3.7	2.3	5.0	3.2	3.2	5.1	3.1	5.0	3.3	2.2	5.0	3.3	5.5	4.4
大工場の工員	6.6	7.6	7.4	7.0	6.1	6.4	6.4	5.9	7.7	7.9	8.0	7.5	6.6	6.7	6.8	7.2
ふつうの事務員	6.8	5.3	6.0	6.4	7.6	7.8	7.1	6.1	6.8	4.7	5.7	6.2	7.2	8.0	7.1	5.6
小学校の先生	7.3	6.4	6.1	5.3	5.4	2.9	4.7	6.8	6.3	6.4	5.6	5.0	4.4	3.6	4.5	5.7
大きな店の店員	7.0	5.5	5.6	7.5	7.8	7.6	7.9	7.1	6.2	5.7	5.7	7.0	7.2	7.7	7.3	6.8
タクシー・トラック の 転 運 手	7.1	8.9	8.3	8.6	5.8	6.4	7.8	7.4	6.7	9.0	8.7	7.9	6.7	6.5	7.8	8.7
町工場の工員	9.1	8.4	9.5	9.3	7.4	7.3	7.9	8.4	10.2	8.6	9.8	9.8	7.8	7.0	8.5	9.6
小さな店の店員	9.8	5.7	8.2	9.5	8.3	8.9	9.2	8.9	10.1	5.0	8.9	10.0	8.6	9.0	9.6	9.3
日やとい人夫	11.3	10.8	11.4	11.6	9.0	6.1	8.9	11.5	11.6	11.0	10.4	11.8	9.0	5.4	10.1	11.6

(注 * 基準1～8の番号は Table 5 の基準番号に同じ)

の平均順位の一一致係数 W は、男子 1.000、女子 .986、また、信頼性の最も低い基準は、「やりがいのある順」でその一致係数は、男子 .965、女子 .976であり、順位づけの信頼性はかなり高いとみてさしつかえないであろう。

中学生がひとつひとつの職業についてもつているイメージを明らかにするために、各基準ごとにそれぞれの職業の平均順位を求めて比較検討した (Table 7)。男子の場合を例にとってみると、大工場の技師はもつともなりたい職業に順位づけられているが、これは、お金はもうかるし、スマートで地位が高くよのなかのためにもなりやりがいもある。必ずしもらくでないが、全体として価値の高い職業というイメージをもたれている。次になりたい職業として順位づけられている会社や役所の課長はお金が一番もうかるしスマートで地位は高いが、技師と異なり、仕事はもつともらくであるが、必ずしもよのなかのためにならないしやりがいもあるとはいえない職業で、全体として価値は中位に判断されている。これらと

傾向の違うのは、なりたい順ではやや低く順位づけられている小学校の先生で、お金はもうかる方ではないが、もつともよのなかのためになる職業であると判断されている。

(3) 選択職業の評価

自己の選択した職業について、6基準から5段階評定させた (Table 1 <調査票 1> (3))。その結果、階層差はほとんどみられなかった (Table 8)。

それぞれの基準から判断すると、自己の選択した職業は、お金はもうかる方でももうからない方でもなく、やりがいはややあり、地位は高くも低くもなく、ややよのなかのためになり、仕事はややつらい、全体として価値はどちらかといえばやや高いと、評価されている。

(4) 将来の生活のイメージ

中学生がもつている将来の生活のイメージを明確にするために、イメージを7つに類型化し、自分の生きかたにもつとも近いものをひとつと、のぞましいと思うものを

Table 8 選択職業の評価

基準		お金はもうかるか	やりがいはあるか	地位は高いか	よのなかのためになるか	仕事はらくか	価値は高いか
男子	I	3.3 (0.6)	4.5 (0.6)	3.2 (0.4)	3.9 (1.0)	2.4 (0.9)	3.7 (0.7)
	II	3.3 (0.8)	4.0 (0.8)	3.3 (0.7)	3.8 (1.0)	2.6 (0.8)	3.6 (0.8)
	III	3.3 (0.7)	4.3 (0.7)	3.2 (0.5)	3.9 (0.7)	2.2 (0.9)	3.5 (0.8)
女子	I	3.4 (0.8)	4.2 (0.8)	3.2 (0.4)	3.5 (0.6)	2.6 (1.0)	3.7 (0.6)
	II	3.4 (0.7)	4.2 (0.7)	3.1 (0.4)	3.6 (0.9)	2.7 (0.8)	3.6 (0.8)
	III	3.5 (0.8)	4.2 (0.6)	3.3 (0.6)	3.6 (0.8)	2.9 (0.7)	3.5 (0.6)

(注 各基準について1から5までに評定させた平均値 カッコ内は S. D.)

Table 9 将来の生活のイメージ

所属階層 イメージ		① 自分の生きかたにもつとも 近い生きかた				② のぞましい生きかた			
		I	II	III	計	I	II	III	計
C	一流技師	13(45)	12(26)	9(17)	34 (26.4)	18(62)	27(63)	22(42)	67 (54.0)
F	先 生(専門)	0(0)	4(9)	4(8)	8 (6.2)	15(52)	19(44)	15(29)	49 (39.5)
B	上級ホワイトカラー	5(17)	10(21)	1(2)	16 (12.4)	11(38)	14(33)	10(19)	25 (20.2)
D	下級ホワイトカラー	1(3)	6(13)	5(9)	12 (9.3)	5(17)	11(26)	10(19)	26 (21.0)
G	店 員	1(3)	5(11)	6(11)	12 (9.3)	8(28)	7(16)	8(15)	23 (18.5)
E	職長クラスの工員	5(17)	6(13)	14(26)	25 (19.3)	10(34)	17(40)	26(50)	53 (42.7)
A	工 員	2(7)	1(2)	12(23)	15 (11.6)	8(28)	19(44)	22(42)	49 (39.5)
H	そ の 他	2(7)	1(2)	2(4)	5 (3.9)	1(3)	0(0)	5(10)	6 (4.8)
	無 回 答	0(0)	2(4)	0(0)	2 (1.6)	(0)	(4)	(1)	(5)
計		29	47	53	129 (100.0)	/	/	/	/

(注 カッコ内の数値は%)

無制限に選択させた (Table 1 <調査票 2>(2))。その結果を男子についてのみ階層別に単純集計した (Table 9)。

まず、自分の生きかたにもつとも近い生きかたとして一流技師が26.4%でもつとも多く、職長クラスの工員の19.3%がこれに続いているが、技術関係として両者に工員11.6%のを加えると57.3%に及ぶ。これは事務関係として、上級ホワイトカラーの12.4%と下級ホワイトカラーの9.3%を加えた21.7%をはるかにしのいでいる。

ここで階層別の比較をしてみると、一流技師は、階層ⅠⅡⅢの順に、45%、26%、17%、と減少しており職長クラスの工員は順に17%、13%、26%、また、工員は7%、2%、23%に変つている。技術関係で職長クラスの工員と工員は、階層Ⅱの者から選択されているパーセンテージは低い、これは、階層Ⅱの34%の者がホワイトカラーを選択しているからである。

次に、のぞましい生きかたとしては、やはり一流技師が54.0%で第1位、職長クラスの工員が42.7%、専門職業者および工員の39.5%がこれに続いている。上級および下級ホワイトカラーはいずれも20%強で、この7類型のなかでは必ずしものぞましい生きかたとは考えられていない。

これを階層別にみると、一流技師をのぞましいとしている者は、階層ⅠⅡⅢの順に、62%、63%、42%であるのに対して、職長クラスの工員をのぞましいとしている者は順に34%、40%、50%、工員をのぞましいとしている者は順に28%、44%、42%である。すなわち、階層ⅠⅡでは一流技師をのぞましいとしている者が多いが、階層Ⅲではむしろ職長クラスの工員をのぞましいとしている者の方が多い。

自分の生きかたにもつとも近い生きかたとのぞましい

生きかたと比較してみると、階層Ⅰの場合、のぞましい生きかたの水準が高いがそれに比較的合致した自分の生きかたをイメージとしてもつている。これに反して、階層Ⅲの場合は、のぞましい生きかたの水準自体がやや低くなつており、のぞましい生きかたと自分の生きかたのずれはあまりみられない。階層Ⅱはやや複雑で、のぞましい生きかたについてはむしろ階層Ⅰの傾向を示しているが、自分の生きかたとしては、ホワイトカラーか一流技師の道をイメージとしてもつている。

(5) ま と め

ここで結果の3.1および3.2をまとめてみると、中学生の職業観の傾向をはつきり示すことができるであろう。

まず、職業選択の基準としては、意識のうえでは、第1に「適しているか」「好きか」という基準があげられており、次に「やりがいがあるか」という基準があげられている。「収入が多いか」「収入が安定しているか」という基準はむしろ二義的な意味しかもつていないように思われる。「よのなかのためになるか」「らくか」「地位が高いか」などの基準はほとんど問題にされていない。しかしながら、職業の順位づけでの基準間の相関から、なりた職業の順位と相関の高い基準は、「収入が多いか」「地位が高いか」「スマートか」「らくか」という基準であり、相関のやや低い基準は「やりがいがあるか」という基準である。また、相関のないのは「よのなかのためになるか」という基準である。すなわち、ここで、職業選択の意識のうえでの基準と職業の順位づけから間接に求めた基準との間に矛盾、ずれがあり、しかもそのずれの背後に、「収入が多いか」「収入が安定しているか」「地位が高いか」「スマートか」「らくか」と

いう基準などにあらわれている大衆社会的職業観があることを指摘できる。

次に、学歴志望・職業志望をみてみると明らかに階層差がみられ、階層上の者ほど志望水準は高い。ここで職業の客観的位置関係の認識について検討したところ、階層差はみられず、それぞれの職業はそれぞれの基準ごとにある位置を占めている。このように、職業に相対的な上下の順位関係を認識し、現実には階層によつてどの位置を志望しているか差がみられるにもかかわらず、自己の選択した職業の評価に階層差がみられない。この点については、将来の生活のイメージに階層差の傾向があることを考えると、ひとつの解釈が成りたつてであろう。すなわち、階層上の者は学歴・職業志望は高く、相対的には自己の選択した職業の評価は高くなつてよいはずであるが、階層上の判断水準を自己にとりいれて判断しているために、評価はとくに高くならず、また階層下の者の場合は逆に評価がとくに低くならないのではないかと思われる。

以上から、中学生の進路志望には明らかに階層差があり、将来の生活のイメージにも階層差の傾向があるにもかかわらず、自己の選択した職業の評価に階層差がないということは、職業選択の意識のうえでの基準と順位づけから間接に求めた基準との間の矛盾、ずれの背後にある大衆社会的職業観がそこに働いているからであると考えられよう。つまり、職業選択の基準が主に個人的要因に基づいてなされており、職業の社会的意義が問題にされていないこと、また個人的要因も意味をもつたものであるかどうか問題があることをさきの矛盾、ずれに加えて考えあわせると、大衆社会的職業観が現実の社会に「適応」するための自己合理化に働いているのではないかという疑問が生じるであろう。この点については、後で問題にしたい。

3. 3 二・三の事例研究

ここで、データのなかからいくつかの事例をとりあげて、以上得られた結果と比較しつつ、問題点を深めていく。事例は、大衆社会的状況にまつたくのまれている姿勢の例、状況を認識しつつ生きるべき道の判断に迷っている例、状況と対決して生きようとしている例をとりあげる。なお事例は男子だけに限った。また、誤字の訂正などを除いては生徒の書いたものをそのまま示してある。

(1) 大衆社会的状況にまつたくのまれている姿勢の例

＜階層Ⅰの男子Sの場合——事例Ⅰ＞

学歴志望：普通高校から大学進学を希望

職業志望：サラリーマン（会社で事務を、自分で株式会

社をつくりたい）

選択の理由：気楽でいいから。会社に出勤していて適当にやればお金をくれる。

自由作文：将来は大会社に入り重役から社長にまでなる。けつこんは26才ぐらいになつてする。それまでは自分の好きなことをしてきらくにすごしたい。何しろ若い時代を有効にすごしたい。進学はまず進学率の高い都立高校へいきたい。それは月謝が安い大学にいきたくないからです。大学はまずきらくでいい。試験だけはまじめに受けて……。大学を出ていれば、名刺の肩書きにもいいし……。この大学、高校時代にじやんじやん遊びます。おくさんをもらうとそうはいかないから。

将来は大会社のサラリーマンという職につきたい。地位は自然にとまではいかなくとも上るし、月給はがつぱり入るし、名刺の肩書きにもいいし、なにしろ、僕が望むのは高校卒業後大学にすすみ、大学卒業後は大会社のサラリーマンになり、重役から社長になることです。それから、若い時代は有効に気楽に、年をとつてからは、てきとうにやしなつてもらいます（孫たちに……）。

まとめ：以上を総括すると、Sの場合、大衆社会的状況にまつたくのまれ、むしろ状況に積極的に「適応」しようとしているように思われる。

＜階層Ⅱの男子Nの場合——事例Ⅱ＞

学歴志望：普通高校から大学進学または就職を希望

職業志望：銀行他いろいろ（平凡なサラリーマンでがまんする。国外旅行機パイロット志望であつたが、近視がすすんだためできなくなつたから）

選択の理由：①安定しているところ（定年退職金のあるところ）、②ある程度もうかる（平社員は別）、③外国へも行ける（かもしれない）

自由作文：都立高校の普通科へ入り、アルバイトをしてこづかいをかせぐ。高校をでたら、公立か国立の学校へ入り、ひまをみて小説を書き、才能が認められたら、小説家になる。才能がなかつた場合、卒業後自動車関係の一流会社に入つて平凡に暮らす。

まとめ：Nの場合は、のぞましい生きかたとして、自分が選択した職業以外の生きかたを考えているうえ、自分で選択したサラリーマンは、もつともよのなかのためにならない仕事のやりがいも大してないが、仕事がらくだと判断している（質問紙の資料からもうかがえる）。この判断にたつて、小説家になれなかつたら、「平凡なサラリーマンでがまんする」と述べている。

SとNとを比較すると、Sはとにかくえらくなれ、月給も「がつぱり入り」名刺の肩書きにもいいサラリーマンになりたいと述べているのに対して、Nは安定してある程度収入もいいサラリーマンでがまんすると述べている。ここに状況に対する姿勢の違いがはつきりでている。

(2) 大衆社会的状況を認識しつつ、生きるべき道の判断に迷っている典型的な例

＜階層Ⅱの男子Hの場合——事例Ⅲ＞

学歴志望：普通高校から大学進学を希望

職業志望：民事（または刑事）裁判所および高等裁判所などで、弁護士（または検事）をしたい。

選択の理由：テレビでみたさまざまな活動を政治情勢や権力者によつて法がまげられるのをがまんしきれず。ある者によつて法がまげられ、ある者につごうよく、他の者に不利になるとき、弁護起訴したい。ある政治家が汚職したが、刑事側から検査を受けているとき、権力のある政治家がそれを止めさせたことがあるが、そのようなことがないように、人の命をたいせつにするため（例、ダンプカー等でひき逃げされて死にそして、お金で死の代金を払われる）。

自由作文：ぼくの将来の生き方には二通りある。

ひとつは、高校へ進学し、大学を受けようと思う。もし落ちたら、就職はせず、浪人する。そして、大学に必ず入るように努力する。その間、政治に対する学生活動は決してやらないで。学習およびスポーツ一本やり。大学に入つてもそのようにする。大学を卒業したら、将来会社の幹部になれそうな、安定した会社に就職する。2～3年たつて、自分の仕事・給料が安定してきたら、結婚する。子供は2人ぐらいもつつもり。そして、国内国外に旅行したりする。子供に世話にならないように、お金を預金して、養老院に入るつもりです。

もうひとつは、やはり高校へ進学し、大学にも進学する。そして、政治その他に対して、学生活動に入る。大学を卒業したら、弁護士あるいは検事・事業家になり、後政治家になりたい。そして、軍のない酪農機械技術を主とした平和な国にしたい。その前に、大学を卒業して2～3年たつたら結婚する。

ぼくの希望する高校は、一～二流の都立高校。もし落ちたら私立に行く。都立高校でも評判のない高校にはいかない。進学のために。

まとめ：自分の生きかたとして、ふたとおりあると自ら述べているように、あれかこれかの選択の問題に直面している。Sのようにみずから積極的に「適応」していこうか、それとも、社会の矛盾に積極的に挑んでいこうか、という、きわめて図式化された二者択一の問題が、この事例にはみられる。

(8) 大衆社会的状況の認識にたつて状況と対決して生きようとしている例

＜階層Ⅲの男子Yの場合——事例Ⅳ＞

学歴志望：普通高校から大学進学を希望

職業志望：医者

選択の理由：シェヴァイツァー博士と一緒に働きたい。なぜなら、口でいいことを言つても実行できる人が、現実の社会にはあまりにも少ない。外国との親善だつて、言論するより実際実行したほうが、どんなに役だつかわからない。「人間はみな兄弟」といつたシェヴァイツァー博士の語に賛成できるから。宇宙時代の現在、世界には未開の地が多い。小学生のとき、野口英世の話を聞き、かんげきしたから。

自由作文：普通高校をでて大学に入学を希望の意味。卒業してから一流会社に入りたくない。なぜなら、形の

できているところへとびこむよりも、自分でこしらえて生きていきたい。人間の一生なんてはかないと思う。北極星は、1000光年のかなたから、毎日毎日光をはなつていっているのだ。1000年という長い年月に加えて、それに、光の速度がかけられているのだ。だから、自分の一生を非凡な一生にしたい。自分の一生は一回しかない。そんなためにも、みんなが一流会社に入りたいと願うが、自分だけ他の道をすすみたい。

まとめ：大学を卒業して一流会社に入るという道への反発が強く感じられる。社会の矛盾をどこまでつきつめて認識しているのかについては、もちろんこのデータからは明らかでないし、中3ぐらいでどの程度の認識を期待できるか疑問であるけれども、少なくとも、いままでとりあげてきたような状況へ「適応」しようとする構えは、意識のうえでは、まったくみられず、Yの知能など考慮すると、この考え方が全然現実性のないものではないことがわかる。それだけに、この考え方をいかに深め、いかに実現していくかは、大きな問題として残されるだろう。

以上の事例をみて、現在の中学生の職業観をとおしての、状況に対する姿勢を、いくつかのタイプに類型化することができるだろう。ここではいちいちとりあげなかつたけれども、質問紙のさまざまな項目に対する反応も自由作文を中心とした事例研究の結果と一貫した傾向がみとめられている。そこで、状況への「適応」と非「適応」という軸で類型化すると、大衆社会的状況にむしろ積極的に適応しようとするタイプ（事例Ⅰ）・むしろ消極的に「適応」せざるをえないとするタイプ（事例Ⅱ）・「適応」と非「適応」とを二者択一の問題としてかかえているタイプ（事例Ⅲ）・状況に対決していく志向をもつた非「適応」のタイプ（事例Ⅳ）があげられる。

このように類型化したのは、いくつかのタイプはそれぞれどのような欠陥があり長所があるのか、それぞれどのような点が異なっているのか、その違いはどこから生じてきたのか、それぞれのタイプはどのように形成されてきたのか、また、それぞれのタイプに現在および今後どのように働きかけたらよいのかなど、諸問題の解決の糸口をみいだしたいために他ならない。

Ⅳ 考 察

大衆社会の中学生のもっている職業観の問題点は、職業観がきわめて大衆社会的職業観であること、とくに職業の個人的機能のみを重視して、とくに変革的な意味での社会的機能を見失っていることにしぼれるだろう。

ここでまず、大衆社会的職業観が現実にはどのような社会心理的意味をもっているのか、この点について本研究のデータからできる限り明らかにしてみよう。中学生は、意識のうえでは、職業選択を個人的要因に基づいて

しようとしている。すなわち、「適しているか」「好きか」という基準が第1の選択基準とされ、次に、「やりがいがあるか」という基準が第2の選択基準とされ、「収入が多いか」「収入が安定しているか」という基準は、むしろ二義的な意味しかもつていないし、「らくか」「地位が高いか」という基準はほとんど問題にされていない。しかし、なりたい職業の順位と、「収入が多いか」「地位が高いか」「スマートか」などの基準による順位とは相関がかなり高い一方、「やりがいがあるか」という基準による順位との相関は低いし、「よのなかのためになるか」という基準による順位との相関はない。また学歴志望職業志望には明らかに階層差がある。つまり、これらの事実は、現実に中学生が社会状況に「適応」せざるをえないということを示している。さらにそれと同時に、中学生が状況に「適応」するための自己合理化の手段として、意識的にせよ無意識的にせよ、個人的要因を前面におしだしている可能性が多分にあるということも示している。

ここで、個人的要因のなかみについて検討する必要があるだろう。なぜならば、本来職業が個人的機能を果たすという意味において、個人的要因が重視されること自体は少なくとも誤りではないけれども、「好きだから」「適しているから」という理由がどのような経験資料に基づいてなされているのか、どこまで本人にとつて積極的な意味をもっているのか、という点を明らかにしないかぎり、個人的要因が重視されることの意味を明らかにすることはできないからである。本研究では、この点について実証的データから論ずることはできないが、たとえば、職業選択の理由として「好きだから」「適しているから」と答えているもののなかで、「他に得意なものがないが、これなら好きだから」「そろばんを習っていて、自分はこういうことにむいていると思うから」「おもしろそうだし、好きになれるから」「なんとなく好きだから」などの表現を用いている者が若干みられたことは注目に値しよう。事例研究の検討からも個人的要因重視の傾向は必ずしも積極的な意味をもつていず、むしろ状況への「適応」のための自己合理化の手段となつていく可能性が大いであることを指摘できるだろう。

われわれが、現代ホワイトカラーに典型的にみられる改良主義的で無気力なムードを打破した社会の進歩発展を期待するかぎり、状況へ自己を「適応」させて心理的欲求不満を解消した小市民的幸福感に安住してはならないだろう。なるほど、現実には少なからず状況へ「適応」せざるをえないのは事実である。しかし状況に自己を「適応」させると同時に、状況に対決していこうとする

姿勢をとることが、真の適応の第一歩ではないだろうか。そしてこのような姿勢を、観念的にではなく実際に行動に結びついてくるような形で教育することが、現在もつとも大切なことではないかと思う。

ところで、現在中学校においてはどのような教育がなされているのだろうか。この点について学習指導要領の進路指導に関する部分を問題にしよう。ここで詳しく論ずる余裕はないので簡単に述べると、昭和33年度の学習指導要領改訂により、進路指導は教科からすべて姿を消し、あらためて学級活動にくみいれられた。指導事項としては、(1)自己の個性や家庭環境などについての理解、(2)職業・上級学校などについての理解、(3)就職や進学についての知識、(4)将来の生活における適応についての理解、の4事項があげられている。そこでの出発点は、自己理解、すなわち、「適性」理解であるが、自己理解とは学業成績、知能検査、身体検査、性格検査、職業興味調査、適性検査などに基づいてなされるものである。これらの諸検査は、科学的にきわめて問題の多いことはすでに諸研究によつて論じられている「ひとつの資料」でしかない資料にもかかわらず、これを絶対的な資料に変質させてしまっている。

ところで、なぜこのように変質させなければならなかったのであろうか。この点を明らかにするためには、改訂学習指導要領に流れている基本的な考えかたである「生徒の進路特性に応じた教育」を行ない、生徒が「適性」に応じた進路を選択すれば、生徒は社会に入つて「適応」するであろうという前提、それ自体を問題にしなければならない。そしてさらに、このような前提が導かれたそもそもの根拠である教育の目標としての「体制への適応」という考えかたにふれなければならない。

すでに述べたように今日の「公」教育が大量操作の手段と化している限りにおいて、それは「体制への適応」を基本的な目標としている。学習指導要領でいう「適応」とは、現実に対して欲求不満をおこさないでいるというきわめて消極的な意味での「適応」でしかない。学習指導要領細案を例にとると、転職離職の問題のとりあげかたに典型的にみられるように、「不適応」の原因が、すべて個人に、それもとくに人間関係における性格的な「不適応」としてかたづけられている。つまり、「体制への適応」を前提とするために「進路特性に応じた教育」ということを強調せざるをえなくなり、そのために「適性」の判断基準として「ひとつの資料」でしかない資料を絶対的なものに変質させなければならなかったのである。

この変質は、まことに都合のよい適性という概念の導

入によつて、巧みにおおいかくされてしまった。“まことに都合のよい”といつたのは、本来職業は適性に基づいて選択されるべき性質のものであるために、適性という基準がそれ自体の客観性、妥当性、信頼性などの科学的な検討はともかくとして、容易に利用されうる便利さをもっているからである。しかも、適性の判断基準となる諸検査は、あたかも科学的な検査であるかのような錯覚をおこさせるに十分なものであつたので「適性」という概念は利用するのにまことに都合のよい概念であつたといえよう。

中学生のもっている職業観が、さきに述べたような問題点をもっているかぎり、少なくとも、この問題点を是正する方向の教育がなされるべきであるのに、学習指導要領で述べられているかぎりでは、現在の教育はそのような教育をめざしているものではなく、むしろその問題点をさらに歪めた形で助長しているものであることは以上の検討から明らかであろう。

本研究では、中学生において現在浸透しつつある職業観がどのような職業観であり、どのような機能をしており、どのような欠陥をもっているか、また、そのような職業観に対してどのような教育がなされており、どのような欠陥をもっているか、などの点をいちおう明らかにした。しかし本来ならば、新しい職業観の確立をめざしてその内容にたちいるべきであつたろうし、真の意味での適応ということを、実証的データをもつて裏づけるべきであつたろう。この方向の研究は、今後の課題として残されている。

さらにつけ加えるならば、研究方法として質問紙法のみによっている点、サンプリングや階層分類の問題、また、女子の問題など、今後さらに検討されねばならない問題が多く残されている。

V 要 約

- (1) 大衆社会といわれる今日の社会状況では、大衆社会的職業観の浸透が著しい。この職業観は、個人を社会状況に「適応」させるけれども、個人が職業をとおして社会を変革するという意味での、職業の社会的意義をまったく無視している職業観である。しかも、中学校の進路指導では、大衆社会的職業観を、問題の多い適性概念によつて、むしろ積極的にうえつけようとしている。
- (2) 本研究では、各階層の中学生のもっている職業観を質問紙調査法により明らかにしようとした。調査対象の中学3年生を、親の職業を指標として階層ⅠⅡⅢに分類した。

- (3) その結果、第1には、中学生の職業選択の基準には階層差がみられず、その基準としては、大衆社会的職業観に基づいた基準があげられていることが明らかになった。たとえば、選択基準としては、適しているか好きか、やりがいがあるか、収入が多いか、収入が安定しているか、などがあげられており、また、なりたい職業と、収入の多さ、地位の高さ、スマートさ、らかな程度、とは相関が高い。
- (4) 第2には、中学生の学歴志望と職業志望には、階層差があり、また、将来の生活のイメージにも、階層差の傾向がみられた。しかし、自己の選択職業の評価に階層差はみられなかつた。
- (5) さらにいくつかの事例研究により、中学生の社会状況に対する姿勢を、状況へむしろ積極的に「適応」しようとするタイプから、状況に対決していく志向をもつたタイプまでの、いくつかのタイプに類型化した。
- (6) 以上の結果から、中学生は、現実には、状況へ「適応」せざるをえないために、大衆社会的職業観によつて、むしろ積極的に状況に「適応」しようとする構えをもっているといえよう。

＜付記＞ この論文は、昭和37年度東京大学教育学部教育心理学科の卒業論文として提出したもの的一部に加筆したものである。ご指導くださった依田新教授、波多野誼余夫氏、調査に協力してくださった池袋中学校大橋一憲教諭はじめ諸先生がたに厚くお礼申しあげる。

文 献

- 堀尾輝久 1957 大衆国家と教育(一), 教育社会学研究 No. 12 74—92
- 松島静雄 1950 職業観 職業科事典Ⅰ 基礎編 平凡社
- 文部省中等教育課編 1958 改訂中学校学習指導要領とその解説 国土社
- 日本社会学会調査委員会編 1958 日本社会の階層的構造 有斐閣
- 横田弘之・吉田裕・小松信重編 1961 学級活動における中学校進路指導細案 明治図書

(1963年4月8日 原稿受付)